

文化生活の基盤のもろさ

おい夫婦の住むマンションが、リフォームの時期が来たというので、二ヶ月の間、別のマンションに仮住まいをしていた。そこがビルの間のマンションで、全館エアコンはいいのだが、窓は開けられず空も見えないところだつたそうだ。まあ、わずかの間だからと我慢をして、さてリフォームのできた自分の住まいに戻つて、ほつとして私のところに報告に来た。全面的なりリフォームだったので、基本的な設備はパックされた最新式のものがとりつけられていたという。

おいが言うには、便利なのはいいのだが、なんだか心配なこともある、とのこと。

「たとえばトイレだけど、そばにいけば自然にふたがあいて、温水洗浄便座はいつも適温、そして人が立ち上がれば水が流れるようになっているんだよ。今度、見に来てよ」

おいの心配とは、こういうことに慣れてしまうと、よそへ行つたとき、水を流すことを忘れてしまうのではないかというのだ。

「それって、ますます人間を無精にして頭を使わなくさせる道具じゃないの」

私は言った。たまたま東京では、落雷で停電し電車が止まつて大騒ぎしたり、送電線にクレーン線がぶつかり、一、二本の線を傷めたことで東京や横浜など広い範囲で停電、電車は何時間も止まつたという事件のあつた直後であつた。もちろん、エレベーターに閉じ込められた人もいたし、信号も止まり、テレビが見られないとかんしゃくを起こした老人もいたという。

たつた一、二本の送電線の事故が、全自动洗濯機ならぬ全自动トイレス

も使えないするがどう文化生活のもうさを、私達はいつも考えておかなければならぬのだと考えた。(六六二字)

吉沢久子 新潟日報一〇〇六年八月二六日付朝刊より